



吉岡 知広
チェロ・コーディネーター
仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科共学を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライプツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライプツィヒ・ゲワントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍第9回ビートルズコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、Cキガリの各氏に、室内楽を全井信子氏、東京クァルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



野平 一郎
ピアノ
東京藝術大学大学院修了後、パリ国立高等音楽院に学ぶ。作曲家、ピアノリスト、指揮者、教育者として国際的に活躍。サントリー音楽賞、芸術選奨文部大臣新人賞、同文部科学大臣賞、二度の尾高賞、日本芸術院賞等を受賞。2012年紫綬褒章受章。現在、静岡音楽館AOI芸術監督、東京文化会館音楽監督、東京藝術大学名誉教授、東京音楽大学教授。2022年開催仙台国際音楽コンクールのピアノ部門審査委員長。



神谷 未穂
ヴァイオリン
桐朋学園大学、ハーフリード国立音楽大、同大学ソリストクラスをそれぞれ首席卒業。リ国立高等音楽院最高課程修了。国内外のコンクール多数入賞。仙台フィル横浜シフオニエタ、千葉響シフオニエタ、宮城学院女子大学特命教授。音楽による復興センター東北理事。デュオ・ブリック・クァルテット・パトナとして活動。宮城県芸術選奨受賞。最新CDのアンサンブル・レゾナンス・異国組曲は音楽誌で好評を得ている。



井野邊 大輔
ヴァイオリン
1991年満場一致の支持率を以って入団後、22年に渡りNHK交響楽団に在籍。真摯で誠実なアプローチと構築力により共演する演奏家、指揮者から常に厚い信頼を受け続ける実力派。その多彩な音色と圧倒的な表現力は群を抜く。第68回日本音楽コンクール作曲部門委員会特別賞受賞。2014年より仙台フィルハーモニー管弦楽団ソ首席。2015年より大阪フィルハーモニー交響楽団特別契約首席を兼務。洗星海音楽院特別契約首席を兼任。洗星海音楽院特別契約首席を兼任。洗星海音楽院特別契約首席を兼任。



戸田 敦
フルート
武蔵野音楽大学、パリ・エコール・ノルマル音楽院ティームコンセルヴァトワールを卒業。村田四郎、佐久間出美子、工藤重典、フノワ、フロマンジェの各氏に師事。日本管打楽器コンクール、ブカレスト青年音楽コンクール、日本フルート・コンベンションコンクール等、国内外のコンクールに入賞。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席フルート奏者、武蔵野音楽大学非常勤講師。



清水 梨紗
ハープ
6歳よりハープを始める。1994年桐朋女子高等学校音楽科に入学。桐朋学園大学を経て、同大学研究科を修了。国際ハープコンクールにて、フランスの中丸三千繪氏と、2019年フルートライヴでは工藤重典氏、ミシェル・モラゲス氏、イジュー氏と共演。妹の清水彩華とハープデュオを結成し、軽井沢音楽祭や国際ハープフェスティバルなどの音楽祭に出演している。これまでに佐藤厚子、木村茉莉、ヨセフ・モルナールの各氏に師事。

「プログラム」
クロード・アシル・ドビュッシー

月の光（ハープ独奏）

子供の領分

第1曲 グラドウス・アド・パルナツスム博士

第2曲 象の子守歌

第3曲 人形のセレナード

第4曲 雪は踊っている

第5曲 小さな羊飼

第6曲 ゴリウオーグのケーキウォーク

2つのアラベスク

シランクス

チェロ・ソナタ ニ短調

フルート、ヴァイオリンとハープのためのソナタ

ヴァイオリン・ソナタ 短調

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ
会員募集中!
コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね!”してください。
URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>

新型コロナウイルス感染予防のため、ご協力をお願いいたします。

- 37.5度以上の発熱や咳、咽頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚の喪失等の症状がある方は、ご来場をお控えください。
- ご来場の際は必ずマスクを着用いただき、こまめな手洗い、手指消毒などの感染予防にご協力ください。
- チケットの半券にお客様の氏名・電話番号をご記入ください。万が一、会場で感染者が出た場合は、連絡先を保健所等の公的機関へ提供させていただきます。あらかじめご了承ください。
- 新型コロナウイルス接触確認アプリのインストールを推奨します。
- お客様同士の距離の確保をお願いいたします。
- 時間に余裕をもってお越しください。
- 会場では大声での発声はご遠慮ください。
- 退場は順番にご案内いたします。
- 出演者・関係者へのプレゼントおよび、お客様のお荷物のお預かりはできません。
- 出演者・関係者への面会はお断りします。

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
イズミノオト 第7回 ドビュッシー 月ノ光

ピアノ
野平 一郎

ヴァイオリン
井野邊 大輔

フルート
戸田 敦

ヴァイオリン
神谷 未穂

チェロ・コーディネーター
吉岡 知広

ハープ
清水 梨紗

2022
2 / 27 (日)

〔開演〕午後3時（開場 午後2時30分）

〔会場〕仙台銀行ホール イズミティ 21 小ホール
（仙台市営地下鉄泉中央駅北3出口すぐ）

〔入場料〕全席指定 3,000円

（市民文化事業団友の会料金 2,700円）

※未就学児はご入場いただけません

2021年12月3日（金）一般発売

Claude Achille Debussy

〔プレイガイド〕 仙台銀行ホール イズミティ 21、日立システムズホール仙台、藤崎、仙台三越、ローソンチケット (Lコード:22284)
〔チケットに関するお問い合わせ〕 仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30～17:00)
〔公演に関するお問い合わせ〕 仙台銀行ホール イズミティ 21 TEL:022-375-3101(9:30～19:30休館日を除く)
〔主催〕公益財団法人仙台市市民文化事業団、kbb東日本放送 〔企画制作〕仙台銀行ホール イズミティ 21、HAL PLANNING
〔協力〕日本音楽財団(日本財団助成事業) 〔協賛〕仙台銀行





クロード・アシル・ドビュッシー

フランス印象派を代表する作曲家、クロード・ドビュッシー。その創作の最大の特徴は、音楽によって色彩や香り、運動、大気までも表わしたことにあります。フランス古典主義の伝統を礎としつつ、そうしたものを表現するために、独特の音階やハーモニーを用いました。また、20世紀前期にフランスにジャズが流入すると、いち早く自らの作品に取り入れました。ここでは、自由な感性にあふれた作曲家、ドビュッシーの生涯を、彼の名作とともに追っていきます。

文 道下京子(音楽評論家)

●パリへ、そして音楽との出会い
1862年8月22日、クロード・ドビュッシーは父マニュエルと母ヴィクトリーヌのもと、パリ近郊のサン＝ジェルマン＝アン＝リレに生まれました。父は陶器商を営んでいましたが、ドビュッシーが5歳の頃に一家はパリへ移り住みます。父は何度か転職するなど、暮らして向きは決して楽なものではなかったと思われます。

ドビュッシーの妹や弟は、カンヌに住むおばに預けられました。彼も1870年におばのもとに滞在する機会があり、そこでヴァイオリニストからピアノの手ほどきを受けます。

時は普仏戦争の真っ只中でした。1871年、父は失職したのちに国民軍に入りますが、ほどなく捕虜となつてしまいます。収容所では作曲家シャルルド・シヴリとの出会いがあります。その伝で、ドビュッシーはモテ夫人(詩人、ウエルレーヌの義母)にピアノを習い始めます。ショパンの弟子と伝えられる彼女の指導は、ドビュッシーが音楽の道を切り開いていく大きなきっかけとなりました。

●パリ音楽院時代：ローマ大賞への挑戦
1872年10月、ドビュッシーはパリ音楽院のピアノ科に入学。マルモンテルにピアノを師事するも、なかなか1等賞をとることができず、ピアノ科を離れます。ピアノ伴奏科ではバズィーニに学び、1880年に1等賞を獲得。また、ソルフェージュをラヴィニャックに学び、1等賞を得ます。その他、和声法をデュランに、ギローに作曲法を師事しました。

パリ音楽院在学中の1880年、ロシアの鉄道王メックの未亡人(チャイコフスキーのバトロン)として知られるの3か月以上におよぶ旅行に、ドビュッシーはピアノリストとして同伴します。その翌年と翌々年にも彼女の旅行に同伴し、ロシアやイタリアに滞在。《ピアノ三重奏曲ト長調》は、メック夫人との旅行の期間に作曲されました。

また、ドビュッシーは音楽院在学中、ローマ大賞に3回挑戦します。ローマ大賞は、当時の若手作曲家の登竜門のような存在と言えましょう。1884年、彼は《カンタータ「放蕩息子」》でローマ大賞を獲得しました。

ドビュッシーは、1884年までパリ音楽院に在籍し、ローマ大賞の規定により翌年からイタリアへ留学し、メデイチ家の別荘に滞在。しかし、保守的な傾向に飽き足らなくなり、パリへ戻ってしまいます。アカデミーに提出した《ジュレイマ》は、「理解しがたい上演不可能なもの」と変更を余儀なくされました。

●印象派の作曲家として

1887年3月、ドビュッシーは2年間のローマ留学を終え、パリへ戻ります。1887年にローマで作曲された《管弦楽のための「春」》をアカデミーに提出しますが、「漠然とした印象主義」との批判を受け、受理されませんでした。当時、印象主義という言葉は、モネの絵画「印象、日の出」に対して呼ばれた批判的な言葉でした。ドビュッシーは、モネの絵に通じるものを感じ、絵画への造詣を深めていきます。

もともとワーグナーに関心を寄せていた彼は、88年と89年にバイロイトへ赴き、《楽劇「ニルンベルク」のマイスタージン

ガー」などのオペラや楽劇などを観ました。ワーグナーへの関心は徐々に薄れていきますが、その後作曲された《オペラ「ペレアスとメリザンド」》は、彼の《楽劇「トリスタンとイゾルデ」》からの影響を強く示しています。

1889年、ドビュッシーは国民音楽協会へ入会。この団体は、フランスの器楽の興隆を目指して1871年にサン＝サーンスらによって創設されました。

1880年代のドビュッシーは、歌曲を多く作曲しています。恋愛感情を抱いていたアマチュア声楽家のマリ＝ブランシュ・ヴァニエらとの出会いは、彼の歌曲への創作意欲を高めたのかもかもしれません。

●異国趣味

異国趣味は、当時のフランスの文化を彩っていました。その背景となったのは植民地文化です。異国のさまざまな文化は、フランス文化と見事に融合していきます。ドビュッシーは、1889年に開催されたパリ万博でガムランなどの東南アジアの民族音楽に接し、強い衝撃を受けます。のちに、東南アジアの民族音楽の旋法やハーモニーの響き、リズムといった音の要素を、自らの作品に取り入れるようになります。ピアノ曲の「パゴダ(塔)」「版画」よりや日本の蒔絵の印象を表わした「金色の魚」(映像第2集)よりなどの作品には、そのようなオリエンタリズムが反映されています。

1890年代に入ると、ピアノなどの器楽作品や規模の大きな作品の創作にも意欲的に取り組み、ドビュッシーは彼の個性を確立していきます。特に、1890年から91年にかけてピアノ曲が多く作曲されていますが、この頃に彼の作曲語法が形成されていったと捉えることができます。

●象徴派の詩人マラルメとの出会い

1890年、ドビュッシーは「アシル・クロード」から「クロード・アシル」と名前を変えました。また、この頃から詩人ステファヌ・マラルメの「火曜会」へ参加。また、カフエ「黒猫」など



パリ近郊の街 サン＝ジェルマン＝アール

パリ近郊に生まれ、5歳でパリへ移住。モテ夫人から本格的にピアノを学ぶ。パリ音楽院に入学。

ロシアの鉄道王メックの未亡人の旅行に、ピアノリストとして同伴(81年、82年)。

3度目のローマ大賞の挑戦で《カンタータ「放蕩息子」》で大賞獲得。

2年間のローマ留学を終え、パリへ戻る。

国民音楽協会へ入会。パリ万博でガムランなどに接する。



カミュ・サン＝サーンス

この頃からマラルメの「火曜会」などへ参加。多くの文人や芸術家らと知り合う。ピアノ作品の創作も増え、彼の作曲語法が形成されていく。



詩人・ステファス・マラルメ

《牧神の午後への前奏曲》初演。

リリー(ロザリ・テクシエ)と結婚。

《オペラ「ペレアスとメリザンド」》初演。

エンマ・バルダックと出会い、恋愛関係へと発展。



エンマ・バルダック

- 1905年
- 1914年
- 1917年
- 1918年

10月《交響詩「海」》初演。その半月後、エンマとの間に娘クロード＝エンマ誕生。第1次大戦勃発。病が悪化。演奏活動に終止符を打つ。パリで没。



クロード・モネ「印象・日の出」

Claude Achille Debussy

にも出入りし、多くの象徴派の文人や芸術家らと交流をもつようになります。文法的な規則にとらわれず象徴的な言葉の表現を追求したマラルメの詩は、ドビュッシーに深い影響を与えました。マラルメの詩「牧神の午後」を背景とした「牧神の午後への前奏曲」(1894年初演)の最初の部分にも、その傾向は顕著に見られます。

また、「牧神の午後への前奏曲」と同じ時期に書かれた弦楽四重奏曲も、彼の代表作のひとつです。調性音楽から離れた旋法的な書法や、調性をもったハーモニーの機能から解放された自由な響きは、新たな時代の扉を鮮やかに開いていきました。

時間じくして《オペラ「ペレアスとメリザンド」》の創作の準備が始まります。フランス語の抑揚を大切にしながら、このオペラは、1902年に初演。その後、欧米で数多く上演され、ドビュッシーの名は広く知られるようになりました。

私生活では、恋愛をいくつ重ねています。なかでも、ガブリエル・ポンは初期のドビュッシーの作曲活動を献身的に支えました。ところが、彼が別の女性に心を寄せたことに絶望し、デュボン は自殺未遂。ふたりは破局を迎えます。1898年、彼はリリー(ロザリ・テクシエ)と出会い、翌年に結婚しますが、彼女もこの自殺を図っています。彼の女性への愛はあまりにも複雑でした。

●ドビュッシーと絵画

ドビュッシーは、絵画好きとしても知られ、ローランサンやモネ、ロートレックらの画家と交流をもっていました。自らの音楽の創作においても、彼は色彩感を尊重し、音楽と絵画との融合を目指していたのです。

1903年に完成したピアノ曲《版画》で、ドビュッシーは印象派の作風を確立させます。この作品集には、エキゾチックな題材が多く取り入れられています。一方で、その翌年に完成した《喜びの島》は、彼が愛好した画家ヴァーアの「シテール島への巡礼に靈感を得ています。

1904年、ドビュッシーは生徒のラウル・バルダックの母エンマと出会いました。ふたりはほどなく恋に落ち、リリーは拳銃自殺を図ります。翌年、二人の離婚は成立しましたが、ドビュッシーは多くの交友関係を失ってしまいます。そのなかで、1905年10月には「交響詩「海」」の初演を果たしました。海をこよなく愛した彼は、多彩な音のパレットを通して、自身へのイメージを音楽に託したのでしょ。この作品の初版譜の表紙を飾ったのは、葛飾北斎の「富嶽三十六景」の一枚「神奈川沖波裏」です。

●娘シュニエの愛

《交響詩「海」》の初演から半月後、エンマとの間に娘クロード＝エンマが生まれます。ドビュッシーは娘を「シュニエ」と呼んで可愛がりました。その翌年から「子供の領分」の創作に着手し、1908年に完成させます。その年、彼はエンマと結婚しました。

1909年9月、パリ音楽院の上級評議会の一員に任命されます。試験課題の作成も担当し、クラリネットとピアノのための《第一狂詩曲》を作曲。この作品は、いまもクラリネット奏た。

者の重要なパートナーとなつています。視覚の世界を音で表現する彼の作風は、1910年に完成した《前奏曲集 第1集》でさらに具現され、それまでの長調や短調とは異なる新しい音階を用いた音楽が示されています。1912年には《前奏曲集 第2集》も完成します。

また、1910年ころから、ディアギレフらの委嘱を受けてバレエ音楽にも意欲的に取り組むようになり、1913年には《遊戯》と《おもちゃ箱》を書き上げました。

●晩年

1914年、第1次大戦が勃発。ドビュッシーの病氣も深刻さを増していきます。彼は戦争と病気に苦しみながらも、同年秋にショパンの楽譜の校訂を引き受けました。海外へ赴いたのも、この年が最後でした。

1915年には、「12の練習曲集」を完成させました。この作品は、ショパンの練習曲を礎としつつ、一部にはサン＝サーンスの影響も見られます。またその頃、彼は「さまざまな楽器のための6つのソナタ」を構想し、亡くなるまでに3曲書き上げます。すなわち、1915年に完成した《フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ》と《チェロ、ソナタ》と、1917年に完成した《ヴァイオリン、ソナタ》です。その年の終わりに、ろに腸のがんと診断されます。

経済的に困窮した状態が続いていたドビュッシーは、先妻リリーへの月々の手当ても滞り、1916年に裁判所からリリーへの支払いを命じられています。

病が進行しても、ドビュッシーは創作とともに演奏活動を続けていましたが、1917年7月に《ヴァイオリン、ソナタ》をヴァイオリニストのガストン・ブーレ(第3回仙台国際音楽コンクール(2007年)ヴァイオリン部門で審査副委員長を務めたジェラルド・ブーレの父)との共演後、演奏活動に終止符を打ちます。

1918年に入ると重篤な状態となり、3月25日パリで息を引き取ります。55歳でした。